2009.7

昭和21年7月10日第3種郵便物認可

白球

南部龍神

幼なじみのバッテリー

12回裏2死。最後の打者がセカンドフライに倒れ、試合終了を告げるサイレンが紀三井寺球場に鳴り響いた。3時間を超える激闘の末の3―5。南部龍神の短い夏が終わった。

投手・玉置寛也と捕手・芝崎唯右のバッテリー2人は、保育所からずっと一緒に過ごしてきた幼なじみ。小学1年生からは同じ少年野球チームに入り、10年以上共にボールを追いかけてきた。

5人いる3年生部員で、地元田辺市龍神村の出身選手は玉置と芝崎唯の2人だけ。辞めていく部員もいる中で、3年間互いに励まし合いながら厳しい練習に耐えてきた。「寛也とは、野球だけではなくいろいろな面でずっといいライバル」と芝崎唯は語る。

昨年夏、それまで外野を守っていた芝崎唯が捕手に転向。慣れないリードに戸惑う芝崎唯を、玉置の強気のピッチングが支えてきた。「試合を重ねるごとに息が合ってきた」と監督の宮井直哉は話す。

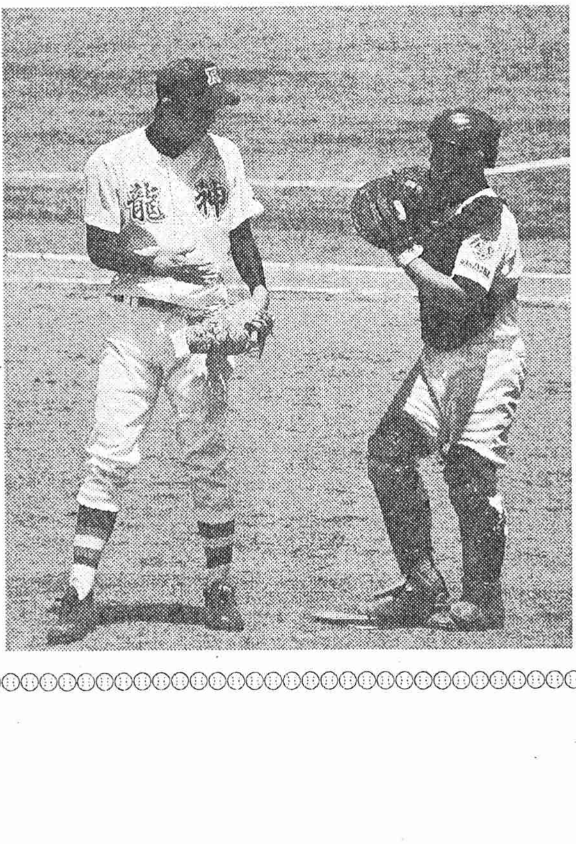
この日の試合は1回裏1死一、二塁から4番玉置の三塁打で2点を先制。続く山本が3点目のスクイズを決めて上々の滑り出しを見せた。しかし、その直後の2回表、玉置が3連続の四死球の後に押し出しの四球を与えてしまう。さらに4回表、ヒットで2点目を取られた後に、またも押し出しの四球を与えて同点になってしまった。

ピンチが訪れる度に、芝崎唯がマウンドの玉置のもとに駆け寄った。「気にせんと思い切り投げてこい」。

延長戦にもつれ込んだ12回表、ついに田辺打線につかまり、マウンドを1年生の芝崎隼に譲った。

試合終了後、2人は泣きじゃくりながらベンチ裏に引き上げた。「今まで一緒に野球をやって来られてよかった」流れる涙と汗をぬぐいながら口をそろえた。

（敬称略）



試合中、マウンドに駆け寄る捕手の芝崎唯(右)と投手の玉置